The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	“イツ”と“カモシレナイ”の共起関係に関する覚書
Author(s)	三宅, 知宏
Citation	現代日本語研究. 2017, 9, p. 96-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

“イツ”と“カモシレナイ”の共起関係に関する覚書

Remarks on the Co-occurrence Relation between *ITU* and *KAMOSIRENAI*

三宅 知宏
MIYAKE Tomohiro

キーワード：イツ、カモシレナイ、トモ限ラナイ、可能性判断、構文

要　旨

本稿は、不定語の“イツ”と、文末形式の“カモシレナイ”が共起する表現について、観察し、記述することを目的としたものである。結果として、“イツ～カモシレナイ”が一種の「型」として、要素の意味に還元できない特定の意味と対応しているということを主張した。あわせて類似の意味が表される“イツ～トモ限ラナイ”にも言及し、さらに本稿の内容を基にした展開として、「構文」の観点による分析が可能になることも示唆した。

1. はじめに

本稿は、不定語の“イツ”と、三宅(1992, 2011)で「可能性判断」が表される形式とされている、文末形式の“カモシレナイ”との共起に関して、従来の研究で指摘されていない表現を観察し、その特性を記述することを目的とする。

なお、本稿では観察と記述に専念し、この表現の分析および説明は別稿に委ねるものとする。

本稿が関心を持つ表現は、次のようなものである。

(1) 首都圏では、いつ巨大な地震が起こるかもしれない。

上の例では、いわゆる不定語の“イツ”と“カモシレナイ”が共起している。詳細は次節で述べるが、このような表現は、いくつかの点で特殊であるとみなされる。そのため、観察、記述される意義のある表現と言えるが、管見の限り、従来の研究では議論はされていない[1)]。

本稿では、この表現に着目することの意義が示されるような形で、この表現

の観察、記述を行おうとするものである。

さらに本稿では、ごく簡単な言及にとどめるが、この表現と類似の関係にあると考えられる、“イツ”と“トモ限ラナイ”の共起という表現にもふれておくことにする。

従来の研究において、“カモシレナイ”という形式は、しばしば分析の対象とされてきたものであるが、その際、“トモ限ラナイ”という形式と対比させることはあまりなく、そもそも“トモ限ラナイ”という形式自体、あまり研究対象になってこなかったと言える。

(2) 首都圏では、いつ巨大な地震が起こるとも限らない。

上の例は、前掲の(1)と類似の意味を表していると思われる。不定語“イツ”との共起に着目することによって、“カモシレナイ”と“トモ限ラナイ”の対比が興味深いものとなるのである。

ただし、繰り返すが、“トモ限ラナイ”に関して、本稿においてはごく簡単にふれるだけであり、本格的な分析は別稿を用意する。

本稿は、次のような構成をなす。次の２.において、“イツ”と“カモシレナイ”の共起に関する観察と記述を行い、３.において、“トモ限ラナイ”による類似の表現にふれる。４.において、この覚書を基にした今後の展開について述べる。

２. “イツ”と“カモシレナイ”との共起

２. １. 問題の所在

次例は、(1)の再掲である。

(1) 首都圏では、いつ巨大な地震が起こるかもしれない。（再掲）

最初に確認しておくべきことは、この表現は、文法性に関して完全とは言えないということである。話者によっては不自然と判断される場合もあり、少なくとも規範的な表現とはみなされない。

しかし、完全に非文法的であるとも言えない。実際に実例も、相当数、採集することができる。

本稿では、この表現を、規範的なものではないことは認めつつも、文法的な

ものとみなして、考察の対象とする。

それでは、この表現の問題点はどのようなものかを指摘する。

上の(1)では、前述のように、不定語の“イツ”と助動詞相当の形式“カモシレナイ”が共起している。一般に、“ダロウ”を除いて、「認識的モダリティ」が表される形式と不定語は共起しないにもかかわらず、この表現では共起しているのである。

(3) *いつ巨大な地震が起こるらしい／ようだ／はずだ／にちがいない／…

しかしながら、不定語“イツ”と共起してはいるものの、(1)は、“イツ”の値を問う疑問文としての解釈にはなっていない。この点が、“ダロウ”との違いである。“ダロウ”の場合は文全体が疑問文となっている[2)]。

(4) いつ巨大な地震が起こるダロウ

その証拠に“ダロウ”の場合は文末に“カ”を後接できるが、“カモシレナイ”の場合は不可能である。

(5) いつ巨大な地震が起こるダロウカ

(6) *いつ巨大な地震が起こるカモシレナイカ

この表現に関する、「認識的モダリティ」が表される他の形式との違いには、“カモシレナイ”は、もともと複数の要素を組み立てて作られた形式であり、その内部に“カ”を含んでいるためである、という説明が容易に想定される。すなわち、“イツ”は主文全体ではなく、“カ”による疑問従属節内に生起していると考える説明である。

しかし、この「説明」はいくつかの点で不適切である。

まず、“カモシレナイ”は、これ全体で「可能性判断」（三宅(1992, 2011)）と呼ぶべき意味が表されており、それは、内部の要素“カ”“モ”“知レ(ル)”“ナイ”の意味の合成では決して得られない。“カモシレナイ”はこれ全体でひとまとまりの形式とみる必要があり、“カ”は本来の機能を失っているとみなければならない。次のような“カ”による疑問従属節をとっている表現と対比すると分かりやすい。

(7) ［ いつ巨大な地震が起こるカ ］分からない／予想した／考えよう／…

また、この「説明」では、後の２.３で観察する諸特徴が説明できない。例えば、上の(7)のような、“カ”による疑問従属節内であれば、不定語の種類は“イ

ツ”に限定はされないし、述語がいわゆる「ル形」に限定されることもない。

(8) [どこで 誰が 何を 書いた カ] 分からない

これに対し、“カモシレナイ”によるこの表現は、後説するように、不定語は“イツ”に限定され、述語は「ル形」に限定されてしまう。

(9) *どこで 誰が 何を 書いた かもしれない

以上のような問題点を解決する唯一の方策は、この表現の表す意味は、[イツ～カモシレナイ] という一種の「型」と対応していると考えることである。いわゆる「構文」と仮定するということであるが、この「構文」に基づく分析は、本稿においては４.において示唆するにとどめる。

本稿はあくまで、(1)のような“イツ”と“カモシレナイ”が共起した表現の特徴を観察し、その意味を記述しようとするものである。

２. ２. データ

以下に、具体的なデータを提示する。現れる環境としては、主節だけでなく、連体修飾節内も可能である。(10)(11)が主節末、(12)(13)が“ノダ”を後接させた主節末、(14)～(20)が連体修飾節、(21)が連用修飾節の例である。

(10)中国では不動産の個人所有が認められていないので（認められているのは所有権のみなので)、せっかく不動産を持っていても、いつ取り上げられるかもしれない。

(11)私もいつ首になるかもしれない。病気になっても安心して医者にかかることができる医療保障制度がこの国には必要です。

(12)そして残念ながら、A 氏の老後は年を重ねるにつれ、赤字が雪だるま式に膨らんでいくだけになってしまうのだ。これは何も、A 氏に限った話ではない。あなたの家計もこのような状況にいつ陥るかもしれないのである。

(13)仮にようやく落ち着く場所を得たとしても、そこがまたいつ戦場になってしまうかもしれないのだ。

(14)東京大地震で世界経済も大打撃。いつ破滅するかもしれない巨大都市が、世界の命綱を握っている。

(15)いつ、あなたの家庭を襲うかもしれない「がんの恐怖」

(16) いつ襲われるかもしれない脳卒中などの病気。

(17) 今年に入ってからも、6 月の岩手・宮城内陸地震、7 月の岩手県北部地震と大きな地震が頻発しており、私たちも、いつ起こるかもしれない地震を身近に感じざるを得ない状況となっています。

(18) くも膜下出血で倒れた。手術をしたが意識は戻らず、いつ死ぬかもしれない状態が続いていた。

(19) いつ発生するかもしれない「大きな災害」の際に身体と生命が軍事的圧迫を受ける危険性を認識せざるを得ず、～

(20) 私たちのようないつ離婚するかもしれない夫婦が仲人なんておこがましいって思っているんでしょう。

(21) 当局が電話の会話を盗み聞く。たわいない内容でも、いつ犯罪の話に変わるかもしれないから一言一句聞き逃さない。

2. 3. 観察

この表現の特性を箇条的に列挙していこう。既に前節で述べた点もあるが、改めて列挙する。

① いわゆる疑問文の解釈はできない。また、“カモシレナイ”は“カ”を内蔵しているが、“カ”本来の機能は失っているため、“カ”による文中の「疑問従属節」(「間接疑問文」) の解釈もできない。したがって、この表現における“イツ”は「疑問詞（疑問語)」ではない[3)]。

(22) *いつ巨大な地震が起こるかもしれないか　［疑問文として］

(23) *[いつ巨大な地震が起こるか] も しれない。

次のような例は、この表現と外形的に類似しているが、“かもわからない”は“カモシレナイ”とは異なり、“か”“も”“わからない”の各要素の合成で意味が得られ、一体化してはいないため、“か”が本来の機能を保持しており、「疑問従属節」の解釈になると思われる。

(24) フランクルは、強制収容所といういつ殺されるかもわからない状況下で「生きるとはどういうことか」という意味について考えてきた。

(24)’ … [いつ殺されるか] も わからない …

② 不定語で可能なのは“イツ”のみであり、他の不定語は不可能である。

(25) *どこで巨大な地震が起こるかもしれない。

(26) *首都圏では、何が起こるかもしれない。

(27) *首都圏では、巨大な地震がどのような結果をもたらすかもしれない。

この点が、この表現の特徴として最も注意すべきことと言える。

ただし、他の不定語（とりわけ“ドコ”）でも、“イツ”と共起して使われた場合は可能である。次のような例を参照されたい。

(28) 少しでも弱みをみせれば、いつどこから誰が襲いかかるかもしれない危険の中で、彼らは生きていたのである。

(29) いつ、どこで起こるかもしれない騒乱に怯えながら、安住の地を奪われて放浪する島民にまじって、何事もなく暮らしてきたのである。

(30) いつどこで死ぬかもしれないという覚悟がいる時代だと思った。

(31) それがいつ、どんな形で自分にはね返ってくるかもしれない。

(32) アピールできる機会には手を抜かないということも重要。それをいつだれがどんなことで目にするかもしれないからである。

③ 「未来」の事態しか表すことができない。「過去」や「現在の状態」は不可能である。そのため、“カモシレナイ”に前接する述語は、（動態）動詞のいわゆる「ル形」に限られる[4)]。

(33) *この地域では、いつ巨大な地震が起こったかもしれない。

念のために付言するが、“いつ”が生起していなければ、“かもしれない”に前接する動詞がいわゆる「タ形」になっていても何ら問題はない。当然、そのような場合は、過去の事態に対する可能性の判断という“カモシレナイ”の本来の意味が表されることになる。

(34) OK この地域では、φ 巨大な地震が起こったかもしれない。

④ いわゆる「認識的モダリティ」が表される形式で可能なのは、“カモシレナイ”のみであり、他の形式は不可能である。

ただし、“ダロウ”は、この表現でなくても、通常の疑問文に生起できるため、“イツ”に限らず、他の不定語とも共起可能である。

前掲の(3)～(6)を参照されたい。

⑤ “カモシレナイ”と類似の意味を表すことができる「迂言的な表現形式」では不可能である。

(35)＊首都圏では、いつ巨大な地震が起こる可能性がある／恐れがある／…

(36)＊首都圏では、いつ巨大な地震が起こりかねない

三宅(1992)に指摘があるように、「可能性判断」が表される迂言的な形式には、“可能性がある”“恐れがある”“～かねない”等があるが、これらは“カモシレナイ”と類似の意味を表すものの、上例のように“イツ”との共起はできない。

ただし、このような「迂言的な形式」は、“カモシレナイ”のような助動詞相当の形式とは異なり、疑問文に生起することはそもそも問題ないので、全体を疑問文の解釈にすれば文法的になる。そしてその場合は、“イツ”以外の不定語でもかまわない。

(35)’OK首都圏では、いつ巨大な地震が起こる可能性がありますか？

(37)どこで巨大な地震が起こる可能性がありますか？

⑥ 評価的にあまり好ましくない／望ましくない事態が表される。

(38)戦場では、いつ流れ弾に当たるかもしれない

(39)♯この売り場では、いつ宝くじに当たるかもしれない

この表現において表される事態は、社会通念上、あるいは話者の認識上、あまり好ましくない／望ましくないものである。したがって、そのような事態が、実現しないように懸念するような意味になる。

上の(38)と(39)の対比を見ると、「流れ弾に当たる」ことは、この条件にあてはまるが、「宝くじに当たる」ことは、好ましくない／望ましくないと認識している話者でない限り、この条件にあてはまらず、結果として(39)は不適切とみなされることになる。

データとしてあげた、前掲の(10)～(21)もすべて、社会通念上、好ましくない／望ましくない事態が表されている。

2．4．記述

以上のような観察をふまえ、この表現が表す意味の記述を行う。次のようになると思われる。

(40)［イツ～カモシレナイ］という「型」は、未来の不定時に、好ましくない／望ましくない事態が発生する可能性があり、そのことを懸念する、という意味が表される。

上の(40)のうち、「未来の不定時」の部分を“イツ”が、「可能性がある」の部分を“カモシレナイ”が担っているとも言えるが、全体的な意味は、部分には還元されず、［イツ～カモシレナイ］という「型」によって表されているとみるべきであろう。

前述したように、この記述をめぐっての詳細な分析、説明は、別稿に委ねることとする。

3．“トモ限ラナイ”の場合

ごく簡略な言及にとどまるが、“イツ～カモシレナイ”と類似の意味を表す、“イツ～トモ限ラナイ”についてふれておく。

(1)首都圏では、いつ巨大な地震が起こるかもしれない。　（再掲）

(2)首都圏では、いつ巨大な地震が起こるとも限らない。　（再掲）

上はいずれも再掲だが、類似した意味が表されていると言える。ただし、“トモ限ラナイ”に関しては、次例のように、前接する述語を否定の形にしても、同じ意味が表されるという、非常に興味深い特徴がある。

(2’)首都圏では、いつ巨大な地震が起こらないとも限らない。

まず、“イツ”と共起していない、一般的な“トモ限ラナイ”の用法を見ておこう。

(41)起業できる人はまれだ。うまくいくとも限らない。たくさんの失敗の中で、成功モデルを作り出す人が次の時代を開くだろう。

(42)再開するとまた事故が起こらないとも限らない。できるだけ自粛してほしい。

(43)日本でも、最初に対応を誤ると、少数の感染者によって、アウトブレイク（伝染病の突然の大発生）が起きないとも限らない。

上のような例では、“トモ限ラナイ”に前接する事態は「好ましい／望ましい」ものであり、“トモ限ラナイ”によって、そうならない可能性があるということが表されている。

例えば、(41)なら「うまくいく」、(42)なら「事故が起こらない」という事態は「好ましい／望ましい」ものであるが、“トモ限ラナイ”によって、そのような事態にならない可能性があることが表されている。

少しややこしいが、前接する事態の述語が否定形の場合、「“…ない”事態にならない可能性」を表すことになるので、結果として、「“…ない”の“…”の部分が表す事態になる可能性」が表されることになる。(42)なら「事故が起こる」という事態、(43)なら「アウトブレイクが起きる」という事態になる可能性があるということである。

いずれにしても、“トモ限ラナイ”の場合、“イツ”と共起しなくても、“イツ～カモシレナイ”と類似の意味が表されると言える。

実際、次例は、“イツ”と共起している例であるが、“イツ”を取り除いても同様の意味が表されると思われる。

(44)いつ敵対的な買収を仕掛けられ、子会社もろとも経営権を奪われないとも限らない。

(45)ただ、この年齢になると、今は元気でもいつ病気や事故にあわないとも限らないから、身辺は整理しておかないといけない。

(46)外務省の抜本的な体質改善がないまま巨大な ODA 利権を残していては、新しい族議員がいつまたそこに巣を作らないとも限らない。

そうすると、“トモ限ラナイ”の場合は、“イツ”は単なる強調のための修飾に過ぎないかと思えるが、そうではない。次のような例を見られたい。

(47)今後の支援がいつ打ち切られるとも限らない。

(48)車を運転すること自体が危険だという認識が、社会で薄くなっているのかもしれない。だれもが、いつ同じ被害に遭うともかぎらない。そういう気持ちで、遺族や被害者の声を聞いてほしい

(49)だが、KHV はすでに国内に入っており、いつニシキゴイに感染するとも限らない。

上の(47)なら「支援が打ち切られる」こと、(48)なら「被害に遭う」こと、

(49)なら「感染する」ことは、いずれも「好ましくない／望ましくない」事態であり、本来的な“トモ限ラナイ”が表す意味に合わない。したがって、これらは“イツ”がなければ不適格な表現になる。

(47)’#今後の支援が打ち切られるとも限らない。

なお、前接する述語を否定の形にすれば、「好ましい／望ましい」事態ということになり、“トモ限ラナイ”の表す意味に適格になる。

(47)”OK今後の支援が打ち切られないとも限らない。

要するに、(47)は、(47)’ではなく、(47)”が表すような意味と同じだということである。これは、“イツ”が単なる強調以上の役割を果たしていることを意味する。

ちなみに，(47)”のような「好ましい／望ましい」事態であれば，“イツ”の生起は随意的になる。すなわち“イツ”が生起しても大きく意味は変わらない。

(47)”今後の支援が打ち切られないとも限らない。

＝いつ今後の支援が打ち切られないとも限らない。

前掲の(2)と(2)’は同義であると述べたが，同じ意味を表すために，(2)の“イツ”は必須，(2)’の“イツ”は随意的ということになる。

このような点は、さらに分析が必要であるが、本稿では、前述のように、指摘するにとどめておく。

もう１点、これも指摘にとどまるものであるが、言及しておく。“トモ限ラナイ”の“モ”を“ハ”にした、“トハ限ラナイ”という表現についてである。

(50)（必ずしも）首都圏で、巨大な地震が起こるとは限らない。

詳細はここでは述べないが、“トハ限ラナイ”の場合、前接する事態の評価性には限定がない。すなわち、「好ましい／望ましい」事態であっても、そうでなくてもかまわないということである。

評価的に中立な事態に対して、そうならない／そうではない可能性があるということが表されると言える。

そうすると、「好ましい／望ましい」事態の場合は、“トモ限ラナイ”とよく似た意味が表されることになる。実際、次例は類似している。

(51)首都圏で、巨大な地震が起こらないとは限らない。

(52) 首都圏で、巨大な地震が起こらないとも限らない。

しかしながら、本稿が関心を持つ“イツ”との共起という点に関しては、明確な違いが見られる。“トハ限ラナイ”は不可能なのである。

(53) *首都圏で、いつ巨大な地震が起こらないとは限らない。

(54) OK 首都圏で、いつ巨大な地震が起こらないとも限らない。

この点も、助詞“モ”の特性と考え合わせることによって、非常に興味深い分析が可能になると予想されるが、詳細は別稿に委ねたい。

4. おわりに —今後の展開—

本稿は、不定語の“イツ”と文末形式の“カモシレナイ”が共起した表現について、観察、記述を行った。結果として、“イツ～カモシレナイ”がある種の「型」として、次のような意味を対応していることを述べた。次は再掲である。

(40) ［イツ～カモシレナイ］という「型」は、未来の不定時に、好ましくない／望ましくない事態が発生する可能性があり、そのことを懸念する、という意味が表される。　（再掲）

そして、この意味と類似の意味が表される“イツ～トモ限ラナイ”についても言及した。

本稿における観察、記述をもとにして可能になる今後の展開について、簡単に述べておく。

本稿では、記述に際し、「型」ということを導入し、それに対応する意味を考えたが、この方法は直ちに、一般に「構文」と呼ばれている概念を想起させる。ここで言う「構文」とは、「要素の意味に還元できない意味と対応する構成体」というようなものである。

本稿で対象とした、［イツ～カモシレナイ］は、今後、「構文」としての分析が興味深いものになると考えられる。その際には、［イツ～トモ限ラナイ］もあわせて、耳慣れない用語であるが、「懸念構文」というような「構文」を設定することができるという見通しを持っている[5)]。

日本語における「構文」の研究は、近年、活性化しつつあると思われるが、本稿で対象とした表現も、その一翼を担える可能性を、潜在的に有しているこ

とを最後に付記しておきたい。

注

1）管見の限り、本稿のもととなった三宅(2005)で指摘された程度である。

2）疑問文に生起した“ダロウ”についての詳細は、三宅(2011)を参照されたい。

3）“知れる”という動詞は、現在、ほぼ使われないと言えるが、「彼の行方は杳として知れない」のような少しかたい表現等では使われることもあると思われる。“知れる”を独立した動詞として使用できることを前提とすると、“かもしれない”が一体化しておらず、各要素の合成によって意味が得られる場合も考えられる。次のような文脈に生起した場合である。

ⅰ．彼がどこへ行ったか知れない。そして何をしているかも知れない。

このような場合の“か も 知れない”は、一体化した“かもしれない”ではないし、当然、本稿が対象としている表現でもない。

4）次の例は、“イツ”以外の不定語と共起している点で②の、そしていわゆる「タ形」に“カモシレナイ”が後接している点で③の反例のように、一見、思われる。

ⅰ．そのとき、わたしは自然に合掌し、それまで何万遍唱えたかもしれない念仏「南無阿弥陀仏」が腹の底から口をついて出たのであった。

しかし、これはおそらく誤用であり、「…唱えたかしれない…」のように“も”がない形が正しいと思われる。実際、解釈も“も”が不要なものであり、“しれない”の部分を“分からない”に代えても同義である。

5）“イツ～カモシレナイ”と“イツ～トモ限ラナイ”の関係性を考える上では、次例のような“イツ～トモ知レナイ”という、あまり生産的ではないが、存在する表現が関わっている可能性があるが、この点も指摘するだけにとどめておく。

ⅰ．いつ果てるとも知れない

ⅱ．いつ終わるとも知れない避難生活

参考文献

三宅知宏(1992)「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学篇』第 26 号 pp. 35-47 大阪大学文学会

三宅知宏(2005)「認識的モダリティ研究のこれからの課題」阪大日本語学研究会 講演資料

三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

（文学研究科准教授）